



Newsletter

NO.49

Dec. 2023



増田迂直墓誌

contents

増田迂直墓誌について	永山 修一 (2)
増田迂直墓誌の構造と移設	橋本 達也 (7)
収蔵標本を活用した植物相調査と絶滅危惧種の保全—長崎県対馬の事例—	山本 武能 (9)
JSTOR Global Plantsにおける植物のタイプ標本の公開	田金秀一郎 (11)
マレーシア・クアンタンの魚類多様性に関する国際共同調査	本村 浩之 (12)
大型魚類標本の保管スペースの移設	本村 浩之 (14)

増田迂直墓碑について

永山 修一（ラ・サール学園）

はじめに

2023年10月、増田直治（号・迂直）の墓碑が、鹿児島市草牟田墓地から、鹿児島大学総合研究博物館の前に移設された。その経緯及び増田直治という人物について紹介していきたい。

1 増田迂直墓碑との出会い

筆者は1993年より『宮崎県史』編纂事業に古代史部会の専門調査員として関わることになり、考古部会のメンバーとも交流することが増えた。そうした中、宮崎県東諸県郡国富町本庄古墳群27号墳（猪塚）の存在を知った。この古墳は、古墳時代中期後葉に位置づけられる長さ47mの前方後円墳であり、その主体部は地下式横穴であった。

寛政元年（1789）に地元の百姓弥右衛門が、溝さらいの最中に天井が抜けて玄室に落ち込んだことにより副葬品が知られることになり、その豊富な出土遺物は、薩州侯に献上され、さらに江戸にも運ばれて多くの「好古家」の目に触れて、いくつもの記録が残された。現時点で、発見から昭和初期までの間にこの古墳について書かれた資料は20を数え、今後も増加していくものと思われる（図1）。

さて、そうした資料のひとつに佐藤成裕（1762～1848）の「塚中の人物」（『中陵漫録』所収）がある。発見年や出土品の点数など不正確な情報も含むが、「薩州の町田直温なるもの、好事に因て其鎧を綴る事を命ぜらる。長崎に在て此町田氏は熟友の好事也。」とあって、この情報が、長崎において町田直温という人物から得られたものであることがわかる。町田直温は、長崎にも拠点を持ち、薩州侯に献上された鎧を修繕する

ことを依頼されるほどの薩摩藩とのつながりを持ち、なおかつ鎧を修理する技術を保持していた人物であった。

残念ながら町田直温という人物を捜し当てることはできなかったが、町田直温は増田直治のことではないかと考える

に至った。佐藤成裕が長崎を訪れたのは寛政九年（1797）、『中陵漫録』の成立は文政九年（1826）とされるから、約30年の歳月が錯誤をもたらしたものとする。

本田親孚（1763～1816）が薩摩藩の名士の墓を探訪し、イロハ順にその略歴をまとめた『称名墓誌』正篇巻2には、増田直治について次のように記載されている。

増田直治温 源舜庵の後にあり。招魂墓なり。本府市人、幼にして学を好み、又書札を嗜み、幼名熊助、字は迂直。文化三年丙寅三月十四日肥州長崎の逆旅に病死。海雲山皓臺寺に葬る。年五十四。同五年戊辰三月友人柁城藤世肅墓誌を其側に建つ。

その正篇3巻には、487名の略歴が載せられているが、市人（商人）として載せられているのは、増田直治を含めてわずかに9名であり、増田直治が薩摩藩内で有名な市人であったことがわかる。これによれば、直治は文化三年（1806）三月十四日に長崎で亡くなり、海雲山皓臺寺に葬られたが、まもなく鹿児島の南林寺源舜庵の後ろに招魂墓がたてられ、その傍らに同五年三月友人伊藤世肅（瓊山）の手になる墓碑が建てられた。

伊藤瓊山（1752～1823）は、長崎生まれで、高松南陵に学んでいるときに、長崎にやって来た直治と同門となった。24歳の時に加治木島津家6代久徴（1752～1809）に仕え、天明四年（1784）に郷賢毓英館の教授となった。伊藤瓊山の詩文集『瓊山文稿』には、文化四年九月に著された「増田迂直墓誌銘」（以下、「墓碑銘」）が収められており、鹿児島大学附属図書館蔵加治木新納家文書所収の『瓊山文稿』は高津孝・丹羽謙治両氏によって2003年に翻刻されている（図2・2000～2002年度科学研究報告書『近世薩摩における大名文化の総合的研究』研究代表者中山右尚）。

増田直治の墓碑がたっていた松原山南林寺の墓地には135000余基の墓があったが、その大部分は、鹿児島市街地拡大に伴って、1922年までに草牟田・興国寺・郡元の各墓地に移設されていった。増田直治墓碑の行方について、鹿児島市の担当部局に問い合わせたものの、わからないという回答であった。



図1 猪塚に関する著書



図2 瓊山文稿（鹿児島大学附属図書館蔵）



図3 草牟田墓地での増田家墓所



図4 草牟田墓地での墓碑

2013年2月、西郷南洲顕彰館で開催されていた「高山彦九郎薩摩下り」展を見に行ったところ、高柳毅館長（当時）より、草牟田墓地に増田直治墓碑が現存するとの情報を得て、早速その足で草牟田墓地に行き、墓碑を確認することができた（図3・4）。

墓碑の一部には欠損があったが、その日付は「文化五年三月庚戌」となっており、これは三月十四日にあたるから、三回忌にあわせて撰録されたもので、草稿段階の「墓誌銘」と完成版の墓碑の銘文を合わせると、この全体を知ることができる（以下、「墓誌」）。

増田直治の子孫にあたる増田雍代氏の御教示によれば、昭和20年代の段階で、直治の墓碑は、鹿児島市西千石町の増田家自宅の庭に置かれていたとのことであり、その後、草牟田墓地の増田家の墓所に移されたという。

その後、増田雍代氏より、将来的に増田家墓地の墓仕舞いを考えなければならないということで、墓碑の移設保存について、相談を受けることになった。

筆者が鹿児島市の文化財保護審議委員会の委員でもあることから、鹿児島市教育委員会文化財課に相談したが、近世の墓碑等については受け入れの基準が整っておらず、受け入れは難しいという返事であった。



図5 市民講座ポスター



図6 市民講座オンライン状況

そこで、他の受け入れ先を探し、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也氏に相談したところ、墓碑を高く評価していただき、加えて草稿段階の「墓誌」を収めた『瓊山文稿』が鹿児島大学附属図書館の所蔵になっているということから、受け入れを快諾いただいた。増田雍代氏にも、鹿児島大学総合研究博物館への寄贈に快諾をいただき、移設費用は増田雍代氏の負担、転倒防止具や解説パネル等の設置費用は鹿児島大学総合研究博物館の負担ということで、2022年10月に移設が完了した。

これをうけて筆者は、2022年12月17日に、鹿児島大学総合研究博物館第40回市民講座において、「江戸後期薩摩藩の学問と学者たちの交流—増田直治をめぐる—」というテーマで話をさせていただいた（図5・6）。

2 増田直治の生涯

増田直治は、多くの知識人と交流を持ち、その交流について数多くの史料が残されている。これらと「墓誌」をもとに増田直治の年譜をまとめた。これに、いくつかの点を加えて、増田直治の生涯を跡づけることにする。

増田家は、鹿児島と長崎に経営拠点を持つ鹿児島城下でも有数の商家であった。直治は、宝暦三年（1753）に増田満矩^{みつり}の三男として誕生した。幕府が享和元年（1801）に刊行した『孝義録』には、奇特者として「鹿児島城下船津町 町人 増田孝兵衛 四十二歳 天明六年 褒美」という記事がある。薩摩藩側の史料には「町家熱病流行、薬用成し難き者トモへ医師相頼みくれ、其の上時々米銭相アタへ候」とあって、増田家は船津町にあり、町方で指導的な立場にあって、寛政九年（1797）の段階で、直治の長兄で増田家当主であった幸兵衛（周明・子直）は下町年寄を勤めていた。福岡藩の藩校甘棠館の祭酒^{かんとうかん}

増田直治年譜（附 墓碑）

年	年齢	事項
宝暦三（1753）	1	五月三日、増田満矩の三男として、鹿児島に生まれる。
明和三（1766）	14	このころまでに、長兄（周明・幸兵衛）に従い、長崎へ行くか？ 長崎の高松南陵に入門？ 伊藤瓊山・吉村迂齋・松村君紀と同門。
明和五（1768）	16	長崎で、亀井南冥と面識を得る。（南游紀行）
明和八（1771）	19	このころ、鹿児島に帰る。
安永四（1775）	23	亀井南冥、来鹿。増田幸兵衛宅に滞在。（南游紀行）
安永八（1779）	27	～翌年 桜島の安永噴火。この後、塩浜に潮受堤防を築く。（高山彦九郎日記）
安永九（1780）	28	木村兼葭堂と手紙のやりとり。（木村兼葭堂日記）
天明元（1781）	29	「孝女門記」を著す。
天明二（1782）	30	橘南谿、「薩州孝子伝」の付録に「孝女門記」を収む。
天明三（1783）	31	橘南谿「薩州孝子伝」刊行。十時梅厓、序文を記す。
天明七（1787）	35	木村兼葭堂に届け物持参。（木村兼葭堂日記） 島津重豪・市田盛常の出府に伴い、江戸へ。以後在府3・4年
天明八（1788）	36	木村兼葭堂と会う。（木村兼葭堂日記） この間、奥羽・蝦夷・韃靼の地に至る。（高山彦九郎日記・薩遊紀行）
寛政二（1790）	38	このころ長島藩主増山正賢、別荘松秀園にて直治のために送別の宴を催す。 このころ鹿児島に私塾養正堂をつくる。 島津重豪の命で、本庄猪塚出土の甲冑を補修。（中陵漫録）
寛政四（1792）	40	高山彦九郎、来鹿。長兄幸兵衛宅に滞在。（高山彦九郎日記）
寛政五（1793）	41	この年、或いは翌年から、長兄幸兵衛にかわり、長崎で家業に従事。
寛政九（1797）	45	長崎に滞在した佐藤成裕と交流。（中陵漫録）
享和元（1801）	49	熊本藩士某、直治宅で蘭酒を飲み、蔵書を閲覧。印刻を求める。（薩遊紀行）
享和三（1803）	51	数ヶ月、病に罹る。
文化元（1804）	52	長崎に行く。
文化二（1805）	53	夏、再び病に罹る。
文化三（1806）	54	三月十四日長崎で死去。長崎の皓台寺に埋葬。 四月六日 鹿児島南林寺に招魂墓をたてる。（称名墓誌）
文化四（1807）		九月、伊藤世肅、増田迂直墓誌銘を著す（草稿段階『瓊山文稿』）
文化五（1808）		三月十四日、墓碑建立。
大正十一（1922）		南林寺→西千石町増田氏邸？。墓碑に「大正十一年」と追刻 のち、草牟田墓地増田家墓所へ。
2022年10月		草牟田墓地→鹿児島大学総合研究博物館

となる亀井南冥（1743～1814）の『南游紀行』によれば、南冥は、安永四年（1775）九月に鹿児島を訪れ、増田幸兵衛宅に1ヶ月近く逗留している。そのきっかけをつくったのは、南冥と長崎において面識を得ていた直治であった。幸兵衛については「京洛儒雅之風」があるという人物評を載せており、増田家は尚学の家であったとすることができる。

安永八年（1779）から翌年にかけての桜島の安永噴火によって鹿児島城下でも地盤沈下が起こった。その被害を防ぐため、直治は南林寺近くの塩浜に長さ130間（236m）、幅8間（14.5m）の潮受堤防を築いたとされる（『高山彦九郎日記』寛政五年四月四日条）。

安永九年（1780）に直治と木村兼葭堂けんかどうとの手紙のやりとりが『木村兼葭堂日記』から確認できる。木村兼葭堂（1736～1802）は、酒造業を営み、18世紀後半の大坂を代表する文人・博物学者であったが、寛政二年（1790）に酒造石高違反の罪に問われて、

伊勢に引退し、伊勢長島藩主増山正賢ましやまさかた（雪斎、1754～1819）の保護を受けた。

天明元年（1781）、直治は、鹿児島城下の堀江町に住む孝女千世を顕彰する「孝女門記」を著しており、天明元年に鹿児島を訪れた橘南谿たちばななんけい（1753～1806）が翌年に京都で刊行した『薩州孝子伝』に掲載されている。これが現在に残る直治唯一の作品となっている。また、『薩州孝子伝』序文で伊勢長島藩儒とときばいがいの十時梅厓（1749？～1804）が直治のことを友人として紹介しており、直治が関西において人的ネットワークを築いていたことがわかる。

天明七年（1787）五月には木村兼葭堂に届け物を持参し、その後鹿児島に戻ったが、九月には前藩主島津重豪（1745～1833）・家老市田盛常しげひで（？～？）の出府に伴って江戸へ向かった。途中、木村兼葭堂のもとに立ち寄っている。

その後、3・4年江戸に滞在したが、その間、確認できるところでは、東は蝦夷地（北海道）から西

は大坂までを活発に動きまわっていた。江戸でも、多くの人々と交流をもったと考えられる。

寛政二年（1790）、直治が鹿児島^{しやうしゅうえん}に戻るに際して、長島藩主増山正賢は、別荘松秀園にて直治のために送別の宴をみずから催した。

鹿児島に戻った直治は、養正堂という私塾をつくった。この塾には、藩校造士館の学生も通っていた。このころ、寛政元年に本庄古墳群猪塚から出土した鎧の修繕を行ったと考えられる。「墓誌」によれば、直治は多芸多才の人で、独特の作風の詩文を草する一方、列記される諸芸の中に「鑄工^{ちゆうこう}の技」が含まれており、これは金属加工の技術のことと考えられ、鎧を修繕する技術を身につけていたことを示している。

寛政四年（1792）の三月末から約2ヶ月、寛政の三奇人の一人高山彦九郎（1747～1793）が鹿児島を訪れ、増田幸兵衛宅に滞在した。このころ、光格天皇^{かんいんのみやのりひと}がその父閑院宮典仁親王^{だいにじよう}に太上天皇の尊号を与えることを求め、これに反対する幕府と朝廷が対立するという状況（いわゆる尊号一件）が起こっており、高山彦九郎は將軍の岳父となっている薩摩藩への働きかけのために鹿児島を訪れたと考えられている。藩当局は、彦九郎の鹿児島入りに難色を示したが、彦九郎の友人で造士館の助教、藩主斉宣の侍読であった赤崎海門（1742～1805）の仲介で鹿児島城下に入った。宿舎は藩当局あるいは赤崎海門によって指定されたと考えられるので、増田家と薩摩藩中枢との密な関係を知ることができる。

『高山彦九郎日記』には、鹿児島で交流を持った230名以上の人物名が記されている。彦九郎の活発な活動は、藩当局の警戒を生じさせたと考えられ、彦九郎と滞在先の増田家の関係はギクシャクしたものとなり、何度も口論したことが『高山彦九郎日記』からわかる。

なお、『高山彦九郎日記』には、「太閤秀吉朝鮮征伐の時に取りたる朝鮮板の詩経書經朱子実紀唐音遺響などを見る、増田家蔵の書珍書多ク貯ふ。」とあり、「墓誌」にも「天下の奇書^{あがな}を購ふ。是を以て大いに蔵書に富み、經史を除くの外、子の集めし雜篇萬余卷有り。」とあって、増田家の蔵書が質量ともに充実したものであったことがわかる。

「墓誌」によれば、寛政五年・六年頃、直治は兄に代わって、長崎での経営を担い業績を上昇させた。

熊本藩士某の鹿児島旅行記である『薩遊紀行』（沖縄県立公文書館蔵）によれば、享和元年（1801）直治宅で阿蘭陀酒を飲んで蔵書を閲覧し、さらに印刻を依頼し、銅印をつくってもらったという記事があ

る。この紀行文には、長兄増田幸兵衛は登場しておらず、幸兵衛は隠居あるいは死去していたとも考えられる。

直治は、長崎と鹿児島を行き来しながら家業をもち立てていたが、享和三年（1803）には数ヶ月病に伏せた。文化元年（1804）長崎に行き、翌年夏再び病に罹って、文化三年（1806）三月十四日に長崎で死去した。すでに述べたように、長崎の皓臺寺に埋葬され、まもなく鹿児島の南林寺^{ちゅうほうん}の中本庵に招魂墓がつくられた。

「墓誌」によれば、直治は、重久氏の女と結婚したが子がなく、長兄幸兵衛の子矩當を嗣子とした。

おわりに

増田直治は、『称名墓誌』に載せられている9人の市人のひとりであり、薩摩藩の中樞（藩主島津重豪・家老市田盛常・加治木島津家島津久徴ら）と深く関わり、当時全国的に著名な長島藩主増山正賢、長島藩儒十時梅涯、大坂の木村兼葭堂、福岡藩儒亀井南冥、京都の医師橘南谿、尊王家高山彦九郎、水戸藩士佐藤成裕などと交流をもった全国的にも名の知られた人物であった。

また、長崎の高松南陵門下で直治と共に学んだ人物に、吉村迂斎・松村君紀（安之丞）・伊藤瓊山^{いづえいさん}がおり、松村君紀は、オランダ通詞として天明元年（1781）前後に薩摩藩に仕官した。伊藤瓊山は、すでに見たように、加治木島津家に仕え、郷黌毓英館の教授となった。吉村迂斎の『迂斎詩集』から、迂斎が鹿児島に遊んでしばしば加治木島津家の久徴に会ったこと、また知覧島津家の久邦^{ひさくに}（久徴の弟）のために詩文を草したことがわかる。また、長崎の蘭通詞堀門十郎（愛生・静衛）も、寛政五年以降薩摩藩との関係を深め、寛政九年に薩摩藩士となり、『成形図説』の編纂に関わっていった。薩摩藩内に存在した長崎人脈のなかで、直治の果たした役割は大きかったと考えられる。

2019年「薩摩の武士が生きた町～武家屋敷群『麓』を歩く～」が日本遺産に認定され、2020年鶴丸城の御楼門が復元され、2023年鹿児島城跡が国の史跡に指定された。鹿児島の近世に注目が集まってはいるが、いずれも武家資料が中心である。薩摩藩の町人に関する研究は手薄であると言わざるを得ない。多数残されている近世の金石文資料など、重要な資料をどのように保存活用するか、今後の重要な課題となると思われる。

増田迂直墓誌が、こうした課題に対する関心を高

める一つのきっかけになることを期待するものである。

参考文献

永山修一2018『本庄古墳群猪塚とその出土品の行方
天明・寛政期薩摩藩の知のネットワーク』(鉾脈社)

主要史料

吉村榮吉編著1972『吉村迂齋詩文集』(マリンフー
ド株式会社社史刊行会)

日本随筆大成編輯部編1976『中陵漫録・柳庵雜筆』

(『日本随筆大成』第3期第3巻 吉川弘文館)

亀井南冥・昭陽全集刊行会編1978「南游紀行」(『亀
井南冥・昭陽全集』第1巻 葦書房)

千々和實・萩原進編1978『高山彦九郎日記』第4巻
(西北出版)

板坂耀子・宗政五十緒編著1991『東路記 己巳紀行
西遊記』(新日本古典文学大系98 岩波書店)

高津孝・丹羽謙治編著2003『瓊山文稿』(中山右尚
編『近世薩摩における大名文化の総合的研究』
研究代表者中山右尚 2000～2002年度科研研
究報告書)

小野まさ子・漢那敬子・田口恵編著2006「史料紹介
岸秋正文庫『薩遊紀行』」(『史料編集室紀要』(沖
縄県) 31号)

水田紀久・野口隆・有坂道子編著2009『木村兼葭堂
日記』(木村兼葭堂全集別巻 藝華書院)

『孝義録』(国立国会図書館デジタルコレクション)

第4面	第3面	第2面	第1面
増田迂直墓誌銘 迂直諱温増田氏薩摩府人父日満矩兄弟三人伯曰周明仲曰盛矩迂直幼而穎悟好學嗜筆札初余童卯遊長崎南陵之門迂直從伯氏來長崎亦遊南陵之門相得驩甚伯氏專管轄生理之事迂直揮不顧經義相問難嶄然見頭角高足弟子皆讓一席亡幾余遊學於東都迂直亦歸省既遊京師浪華之間日與先生長者折旋切劘不相見六七年安永丁酉冬拉天艸中世弼始臻薩主周明之家得與迂直同居叩其所樹立則龍躍豹變非復吳下阿蒙也月餘世弼蹄鄉余筮仕柁城於是乎嘆離合聚散之不常也雖然月一再通鱗羽倘到府城則未嘗不相往返焉如斯者數歲爾後迂直益逞名山大川之遊無遠不屆曰吾將觀所謂金篋玉符河馬洛龜之蹟洩造化之秘也聞者笑其誕天明丁未九月從大夫某君抵東都籍其貲極輿羽諸勝及蝦夷靺鞨之地猶啖肉於餓虎也往往獲石矸珉珉貝錦龜裘等而還至則東都諸貴游風流僧道布衣韋帶之士莫不相援以締交也居三四年將西歸也一日長島侯相要餞別莊松秀園時某某二侯及官闕子弟若名文學書畫者十數人陪筵罄歡酒酣各擒所長有詩有序有題字有跋言或山水花鳥人物隨意掃過迂直亦醉墨淋漓文辭數百言筆不停綴亂以八韻詩一坐觀者吐舌矣豈翅西園雅集而已哉侯乃舉其卷以賜焉迂直大悅裝潢爲一巨軸以此當畫錦之榮矣或家居則作家塾號養正堂教授生徒不窺園者累月鄉黨之人頗化其德也自寬政五年六年以伯氏倦世事代抵長崎勾當會計歲率一番享和癸亥罹疾數月殆不起醫療奏功文化改元甲子復抵長崎明年乙丑猶在長崎夏疾再發不可救藥丙寅之春三月十四日以疾卒於長崎逆旅葬邑東海雲山皓臺禪寺聯燈院以其年四月六日遞葬慶府南林寺內中本菴蓋迂直以寶曆三年癸酉五月三日生享年五十有四歲也世肅曰余與迂直自幼同窗義如兄弟年庚相於其平生所爲未曾不以肝隔許也古之人有高世之才必有遺俗之累如吾迂直其爲人也怪巧瑰琦惟學之耽如無所事事然而善通曉世事勇於爲人旁統衆藝自算數販鬻屠釣種植之業至彫蟲陶冶琢玉鑄工之技賞鑒造製博棋投壺之類皆無不講其蘊且逐什一勉贏羨購天下之奇書是以大富藏書除經史外子集雜篇有萬餘卷加之湯盤孔鼎岐陽之鼓岱山鄒嶧會稽之碑與夫漢魏唐宋以來墨刻字帖彝器尊罍銘記下及古畫籀篆分隸諸家之真本天象地輿夷蠻海外之圖籍無不搜羅而纂鳩也客至則明窗淨几數舒展覽談笑宴飲酒終日不亂雖醉未嘗頽墜與之居者莫不服其雅量也又喜爲詩文自成一家風不傍他牆壁其文信幅難讀古色蕭然殊不作頭巾窠臼爛腐語間則使余言其病言中□則絕倒大叫盆疊皆響其豪放率如此可謂奇人也又可謂福人也使迂直假之年他日志業之所成就其何如哉天道冥冥有不可知者也余自幼同窩忽失鄧人之質嗚呼又何言嗚呼又何言迂直配重久氏無子養伯氏男矩當爲嗣今從余學克繼其業不墜家聲可謂迂直有後矣一日持狀來請曰先人迂直與先生爲莫逆之交五十年量其墓上無一字乎雖然亂過情枉作諛墓語則先人亦不瞑地下也惟先生之所知請實其事余歔歔不能答意者余之筆力不能文迂直之身後固矣況充御之不暇在苒歲月幽明之間不忍負此良友也因次自幼所觀記行事可言者與其狀作誌且作之銘銘曰 嗚呼子之才與學譬如犀象殊玉饑不可食豈使在泥瀆多能該博誰無耳目卜地南林閼幽江麓先兆在近風水戢穀子其安旃以利後族 文化五年戊辰春三月庚戌	迂直諱温増田氏薩摩府人父日満矩兄弟三人伯曰周明仲曰盛矩迂直幼而穎悟好學嗜筆札初余童卯遊長崎南陵之門迂直從伯氏來長崎亦遊南陵之門相得驩甚伯氏專管轄生理之事迂直揮不顧經義相問難嶄然見頭角高足弟子皆讓一席亡幾余遊學於東都迂直亦歸省既遊京師浪華之間日與先生長者折旋切劘不相見六七年安永丁酉冬拉天艸中世弼始臻薩主周明之家得與迂直同居叩其所樹立則龍躍豹變非復吳下阿蒙也月餘世弼蹄鄉余筮仕柁城於是乎嘆離合聚散之不常也雖然月一再通鱗羽倘到府城則未嘗不相往返焉如斯者數歲爾後迂直益逞名山大川之遊無遠不屆曰吾將觀所謂金篋玉符河馬洛龜之蹟洩造化之秘也聞者笑其誕天明丁未九月從大夫某君抵東都籍其貲極輿羽諸勝及蝦夷靺鞨之地猶啖肉於餓虎也往往獲石矸珉珉貝錦龜裘等而還至則東都諸貴游風流僧道布衣韋帶之士莫不相援以締交也居三四年將西歸也一日長島侯相要餞別莊松秀園時某某二侯及官闕子弟若名文學書畫者十數人陪筵罄歡酒酣各擒所長有詩有序有題字有跋言或山水花鳥人物隨意掃過迂直亦醉墨淋漓文辭數百言筆不停綴亂以八韻詩一坐觀者吐舌矣豈翅西園雅集而已哉侯乃舉其卷以賜焉迂直大悅裝潢爲一巨軸以此當畫錦之榮矣或家居則作家塾號養正堂教授生徒不窺園者累月鄉黨之人頗化其德也自寬政五年六年以伯氏倦世事代抵長崎勾當會計歲率一番享和癸亥罹疾數月殆不起醫療奏功文化改元甲子復抵長崎明年乙丑猶在長崎夏疾再發不可救藥丙寅之春三月十四日以疾卒於長崎逆旅葬邑東海雲山皓臺禪寺聯燈院以其年四月六日遞葬慶府南林寺內中本菴蓋迂直以寶曆三年癸酉五月三日生享年五十有四歲也世肅曰余與迂直自幼同窗義如兄弟年庚相於其平生所爲未曾不以肝隔許也古之人有高世之才必有遺俗之累如吾迂直其爲人也怪巧瑰琦惟學之耽如無所事事然而善通曉世事勇於爲人旁統衆藝自算數販鬻屠釣種植之業至彫蟲陶冶琢玉鑄工之技賞鑒造製博棋投壺之類皆無不講其蘊且逐什一勉贏羨購天下之奇書是以大富藏書除經史外子集雜篇有萬餘卷加之湯盤孔鼎岐陽之鼓岱山鄒嶧會稽之碑與夫漢魏唐宋以來墨刻字帖彝器尊罍銘記下及古畫籀篆分隸諸家之真本天象地輿夷蠻海外之圖籍無不搜羅而纂鳩也客至則明窗淨几數舒展覽談笑宴飲酒終日不亂雖醉未嘗頽墜與之居者莫不服其雅量也又喜爲詩文自成一家風不傍他牆壁其文信幅難讀古色蕭然殊不作頭巾窠臼爛腐語間則使余言其病言中□則絕倒大叫盆疊皆響其豪放率如此可謂奇人也又可謂福人也使迂直假之年他日志業之所成就其何如哉天道冥冥有不可知者也余自幼同窩忽失鄧人之質嗚呼又何言嗚呼又何言迂直配重久氏無子養伯氏男矩當爲嗣今從余學克繼其業不墜家聲可謂迂直有後矣一日持狀來請曰先人迂直與先生爲莫逆之交五十年量其墓上無一字乎雖然亂過情枉作諛墓語則先人亦不瞑地下也惟先生之所知請實其事余歔歔不能答意者余之筆力不能文迂直之身後固矣況充御之不暇在苒歲月幽明之間不忍負此良友也因次自幼所觀記行事可言者與其狀作誌且作之銘銘曰 嗚呼子之才與學譬如犀象殊玉饑不可食豈使在泥瀆多能該博誰無耳目卜地南林閼幽江麓先兆在近風水戢穀子其安旃以利後族 文化五年戊辰春三月庚戌	迂直諱温増田氏薩摩府人父日満矩兄弟三人伯曰周明仲曰盛矩迂直幼而穎悟好學嗜筆札初余童卯遊長崎南陵之門迂直從伯氏來長崎亦遊南陵之門相得驩甚伯氏專管轄生理之事迂直揮不顧經義相問難嶄然見頭角高足弟子皆讓一席亡幾余遊學於東都迂直亦歸省既遊京師浪華之間日與先生長者折旋切劘不相見六七年安永丁酉冬拉天艸中世弼始臻薩主周明之家得與迂直同居叩其所樹立則龍躍豹變非復吳下阿蒙也月餘世弼蹄鄉余筮仕柁城於是乎嘆離合聚散之不常也雖然月一再通鱗羽倘到府城則未嘗不相往返焉如斯者數歲爾後迂直益逞名山大川之遊無遠不屆曰吾將觀所謂金篋玉符河馬洛龜之蹟洩造化之秘也聞者笑其誕天明丁未九月從大夫某君抵東都籍其貲極輿羽諸勝及蝦夷靺鞨之地猶啖肉於餓虎也往往獲石矸珉珉貝錦龜裘等而還至則東都諸貴游風流僧道布衣韋帶之士莫不相援以締交也居三四年將西歸也一日長島侯相要餞別莊松秀園時某某二侯及官闕子弟若名文學書畫者十數人陪筵罄歡酒酣各擒所長有詩有序有題字有跋言或山水花鳥人物隨意掃過迂直亦醉墨淋漓文辭數百言筆不停綴亂以八韻詩一坐觀者吐舌矣豈翅西園雅集而已哉侯乃舉其卷以賜焉迂直大悅裝潢爲一巨軸以此當畫錦之榮矣或家居則作家塾號養正堂教授生徒不窺園者累月鄉黨之人頗化其德也自寬政五年六年以伯氏倦世事代抵長崎勾當會計歲率一番享和癸亥罹疾數月殆不起醫療奏功文化改元甲子復抵長崎明年乙丑猶在長崎夏疾再發不可救藥丙寅之春三月十四日以疾卒於長崎逆旅葬邑東海雲山皓臺禪寺聯燈院以其年四月六日遞葬慶府南林寺內中本菴蓋迂直以寶曆三年癸酉五月三日生享年五十有四歲也世肅曰余與迂直自幼同窗義如兄弟年庚相於其平生所爲未曾不以肝隔許也古之人有高世之才必有遺俗之累如吾迂直其爲人也怪巧瑰琦惟學之耽如無所事事然而善通曉世事勇於爲人旁統衆藝自算數販鬻屠釣種植之業至彫蟲陶冶琢玉鑄工之技賞鑒造製博棋投壺之類皆無不講其蘊且逐什一勉贏羨購天下之奇書是以大富藏書除經史外子集雜篇有萬餘卷加之湯盤孔鼎岐陽之鼓岱山鄒嶧會稽之碑與夫漢魏唐宋以來墨刻字帖彝器尊罍銘記下及古畫籀篆分隸諸家之真本天象地輿夷蠻海外之圖籍無不搜羅而纂鳩也客至則明窗淨几數舒展覽談笑宴飲酒終日不亂雖醉未嘗頽墜與之居者莫不服其雅量也又喜爲詩文自成一家風不傍他牆壁其文信幅難讀古色蕭然殊不作頭巾窠臼爛腐語間則使余言其病言中□則絕倒大叫盆疊皆響其豪放率如此可謂奇人也又可謂福人也使迂直假之年他日志業之所成就其何如哉天道冥冥有不可知者也余自幼同窩忽失鄧人之質嗚呼又何言嗚呼又何言迂直配重久氏無子養伯氏男矩當爲嗣今從余學克繼其業不墜家聲可謂迂直有後矣一日持狀來請曰先人迂直與先生爲莫逆之交五十年量其墓上無一字乎雖然亂過情枉作諛墓語則先人亦不瞑地下也惟先生之所知請實其事余歔歔不能答意者余之筆力不能文迂直之身後固矣況充御之不暇在苒歲月幽明之間不忍負此良友也因次自幼所觀記行事可言者與其狀作誌且作之銘銘曰 嗚呼子之才與學譬如犀象殊玉饑不可食豈使在泥瀆多能該博誰無耳目卜地南林閼幽江麓先兆在近風水戢穀子其安旃以利後族 文化五年戊辰春三月庚戌	迂直諱温増田氏薩摩府人父日満矩兄弟三人伯曰周明仲曰盛矩迂直幼而穎悟好學嗜筆札初余童卯遊長崎南陵之門迂直從伯氏來長崎亦遊南陵之門相得驩甚伯氏專管轄生理之事迂直揮不顧經義相問難嶄然見頭角高足弟子皆讓一席亡幾余遊學於東都迂直亦歸省既遊京師浪華之間日與先生長者折旋切劘不相見六七年安永丁酉冬拉天艸中世弼始臻薩主周明之家得與迂直同居叩其所樹立則龍躍豹變非復吳下阿蒙也月餘世弼蹄鄉余筮仕柁城於是乎嘆離合聚散之不常也雖然月一再通鱗羽倘到府城則未嘗不相往返焉如斯者數歲爾後迂直益逞名山大川之遊無遠不屆曰吾將觀所謂金篋玉符河馬洛龜之蹟洩造化之秘也聞者笑其誕天明丁未九月從大夫某君抵東都籍其貲極輿羽諸勝及蝦夷靺鞨之地猶啖肉於餓虎也往往獲石矸珉珉貝錦龜裘等而還至則東都諸貴游風流僧道布衣韋帶之士莫不相援以締交也居三四年將西歸也一日長島侯相要餞別莊松秀園時某某二侯及官闕子弟若名文學書畫者十數人陪筵罄歡酒酣各擒所長有詩有序有題字有跋言或山水花鳥人物隨意掃過迂直亦醉墨淋漓文辭數百言筆不停綴亂以八韻詩一坐觀者吐舌矣豈翅西園雅集而已哉侯乃舉其卷以賜焉迂直大悅裝潢爲一巨軸以此當畫錦之榮矣或家居則作家塾號養正堂教授生徒不窺園者累月鄉黨之人頗化其德也自寬政五年六年以伯氏倦世事代抵長崎勾當會計歲率一番享和癸亥罹疾數月殆不起醫療奏功文化改元甲子復抵長崎明年乙丑猶在長崎夏疾再發不可救藥丙寅之春三月十四日以疾卒於長崎逆旅葬邑東海雲山皓臺禪寺聯燈院以其年四月六日遞葬慶府南林寺內中本菴蓋迂直以寶曆三年癸酉五月三日生享年五十有四歲也世肅曰余與迂直自幼同窗義如兄弟年庚相於其平生所爲未曾不以肝隔許也古之人有高世之才必有遺俗之累如吾迂直其爲人也怪巧瑰琦惟學之耽如無所事事然而善通曉世事勇於爲人旁統衆藝自算數販鬻屠釣種植之業至彫蟲陶冶琢玉鑄工之技賞鑒造製博棋投壺之類皆無不講其蘊且逐什一勉贏羨購天下之奇書是以大富藏書除經史外子集雜篇有萬餘卷加之湯盤孔鼎岐陽之鼓岱山鄒嶧會稽之碑與夫漢魏唐宋以來墨刻字帖彝器尊罍銘記下及古畫籀篆分隸諸家之真本天象地輿夷蠻海外之圖籍無不搜羅而纂鳩也客至則明窗淨几數舒展覽談笑宴飲酒終日不亂雖醉未嘗頽墜與之居者莫不服其雅量也又喜爲詩文自成一家風不傍他牆壁其文信幅難讀古色蕭然殊不作頭巾窠臼爛腐語間則使余言其病言中□則絕倒大叫盆疊皆響其豪放率如此可謂奇人也又可謂福人也使迂直假之年他日志業之所成就其何如哉天道冥冥有不可知者也余自幼同窩忽失鄧人之質嗚呼又何言嗚呼又何言迂直配重久氏無子養伯氏男矩當爲嗣今從余學克繼其業不墜家聲可謂迂直有後矣一日持狀來請曰先人迂直與先生爲莫逆之交五十年量其墓上無一字乎雖然亂過情枉作諛墓語則先人亦不瞑地下也惟先生之所知請實其事余歔歔不能答意者余之筆力不能文迂直之身後固矣況充御之不暇在苒歲月幽明之間不忍負此良友也因次自幼所觀記行事可言者與其狀作誌且作之銘銘曰 嗚呼子之才與學譬如犀象殊玉饑不可食豈使在泥瀆多能該博誰無耳目卜地南林閼幽江麓先兆在近風水戢穀子其安旃以利後族 文化五年戊辰春三月庚戌

増田迂直墓誌銘(『瓊山文稿』と墓碑を合わせて復元)

増田迂直墓誌の構造と移設

橋本 達也（総合研究博物館）

前章で永山修一氏に紹介いただいたとおり、2022年に増田雍代さんから、増田迂直^{うちよく}の墓誌を刻んだ石碑資料を総合研究博物館に寄贈いただきました。

ここではそのものの構造と、常設展示室の前まで移設の記録を紹介します。

まず、この名称ですが、『瓊山文稿^{けいざんぶんこう}』にも、また石碑本体にも「増田迂直墓誌銘」と記されていますので、今後、当館では「増田迂直墓誌」と呼びたいと思います。

銘文は、伊藤瓊山の撰文で、書も篆刻^{てんこく}で名声を得ていた瓊山のものと考えられます。

この墓誌の大きさや構造は図1に示します。

石材は溶結凝灰岩、鹿児島市内北部で採れるいわゆる「たんたど石」製です。石碑表面は丁寧に磨き平滑にした後、文字を刻んでいます。

碑石の下部には柄をつくり出し、四角く加工された台座には柄で結合して、碑石を立てています。完成後、見えなくなる柄部分や台座内面は磨いておらず、粗く削り出したままの加工痕が残っています。

大きな石材を割りおおよその形を整え、ノミ状の工具で原型を整え、見える部分を平滑に削ったのちに、磨き仕上げ、文字を刻む。大まかな作業工程が追えます。

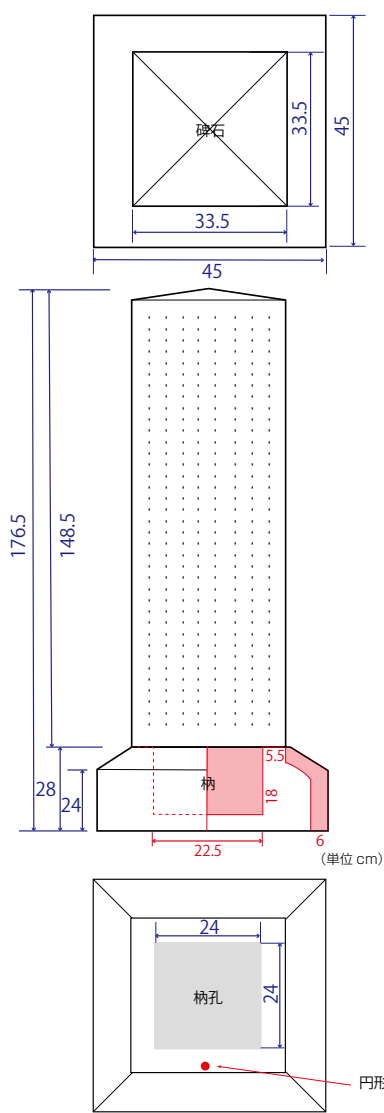


図1 増田迂直墓誌構造図



図2 トラックで草牟田墓地から移動



図3 常設展示室前に仮置き



図4 碑石部分



図5 柄部分拡大（粗い削り）



図6 台座
正面中央に鉄芯の入る円形刻みがある



図7 台座内面（粗い削り）

収蔵標本を活用した植物相調査と絶滅危惧種の保全 —長崎県対馬の事例—

山本 武能（総合研究博物館特任研究員）

私は2023年8月に鹿児島大学総合研究博物館に特任研究員として着任しました（図1）。現在はラオス・ベトナムの石灰岩地の植物相を研究するプロジェクトに携わっていますが、こちらに来る以前は2つの離島地域（対馬・西表島）に居住しており、そこで植物相の調査・研究をおこなっていました。今回は私の自己紹介を兼ねて、これらのうち博物館の収蔵標本を活用した対馬での調査研究についてご紹介します。

対馬は九州本島と朝鮮半島の間に位置する島で、九州まで最短で約80km、朝鮮半島までは約50kmと、距離的には大陸の方が近く、また国内で最も大陸に近い地域です。日本は過去の氷期に海水準の低下により大陸と複数回陸続きになったと考えられていますが（小西・吉川 1999）、その時期には対馬は



図1 植生保護柵内の植物を調査する筆者（長崎県対馬市厳原町、2018年8月28日撮影）。



図2 シカの過採食により下層植生が失われた森林（長崎県対馬市上県町、2019年2月12日撮影）。

陸橋の一部であり、大陸の植物がここを経由して日本へ分布を広げたと考えられます。実際、現在でも対馬には日本で対馬のみ、あるいは対馬と一部の地域のみ分布する大陸系の植物が多く知られており、日本の植物相の多様性とその起源を理解する上で重要な地域といえます。しかし近年ではシカ・イノシシの急増などによって特に下層植生が大きな影響を受けており（図2）、希少種のみならず以前はどこにでも生えていたような、いわゆる“雑草”までもが姿を消しつつあります。ただ、どのような種がどのくらい減少したのか、またどこにどの程度残っているのか、といった基本的な情報はよくわかっておらず、これが効果的な保全対策の実施を困難にしていました。

ある植物がどの程度減少したか（あるいはしていないか）、ということを示すには、過去と現在の生育状況を比較する必要があります。そこで、まずそれぞれの種の過去の島内分布を把握するために、対馬の植物相を報告した文献の調査や現地有識者への聞き取り調査、各地の大学や博物館に収蔵された植

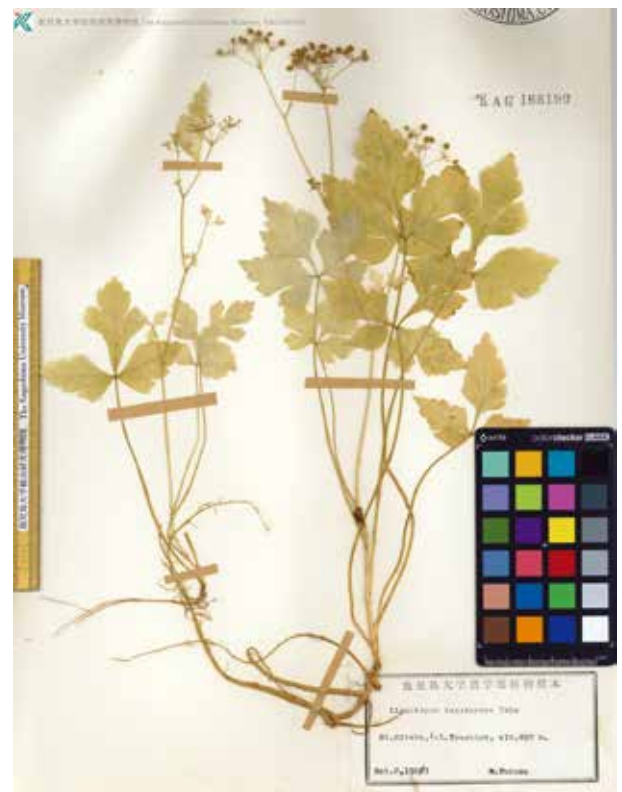


図3 1967年に対馬の御岳で古瀬義が採集したツシマノダケの標本（鹿児島大学総合研究博物館植物収蔵 KAG168190）。



図4 ツシマノダケの過去の分布記録と2019年時点で現存を確認できた地点



図5 現在生育が確認できるツシマノダケ個体（長崎県対馬市厳原町、2018年11月2日撮影）。結実個体でも草丈10cmに満たない。



図6 対馬に生育するハナナズナ（長崎県対馬市厳原町、2017年8月24日撮影）。

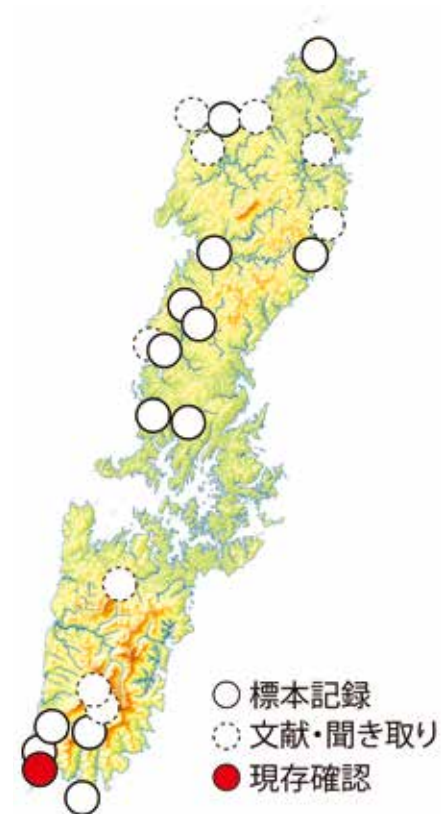


図7 ハナナズナの過去の分布記録と2019年時点で現存を確認できた地点。

物標本の調査を実施しました。特に標本には採集日時や場所などが記録されていることが多いため、その時その場所にその植物が生育していたことを示す強い証拠となります。これらの調査によって明らかになった過去の生育地へ実際に赴いて、その植物が現在も生育しているかを確認することによって、生育地が減少しているのかどうかを示すことができます。

例えば鹿児島大学総合研究博物館には1967年に古瀬義によって対馬の御岳で採集されたツシマノダケ（セリ科、対馬固有種）の標本が収蔵されています（図3）。他の収蔵庫の標本情報も併せて考えると、御岳には少なくとも1980年代後半まではツシマノダケが生育していたことがわかりました。しかし著者らが2012年から2019年にかけて複数回実施した植物相調査では、御岳で本種の生育を確認することはできませんでした。ツシマノダケは過去に御岳を含め島内の5地点から標本が採集されていますが、現在でも生育が確認できたのはそのうち2地点のみであり、残りの3地点に生育していた集団は消失したものと考えられます（図4、東 2015にデータを追加して改変）。消失の直接的な要因は不明ですが、本種は自然度の高いアカガシ林の明るい林内～林縁部に生育することから、造林・開発による自然林の減少や、また近年ではシカ・イノシシの影響も大きく

受けていると考えられます。図2に示した標本の結実個体は草丈が30cm程度あり、これは1980年代以前に採集されたその他の標本についても（多少の個体差はありますが）同様です。しかし現存する個体はいずれもこれより小さく、開花・結実個体でも草丈が10cmを超えるものは稀で（図5）、シカ・イノシシによる採食圧や踏圧によって矮小化が起きていると考えられます。

例をもう一つ挙げると、ハナナズナ（アブラナ科）はより顕著に生育地数の減少がみられた植物です（図6）。本種は大陸系の草本植物で、日本では対馬と本州の一部に知られていますが、本州では既に絶滅したと考えられています（岡山県 2020、広島県 2022）。対馬では1901年から1999年にかけて島内の多数の地点から標本が採集されており、全島の分布する植物でした。ところがこれらの生育地の現状を確認したところ、現存が確認できたのは南部の1地点のみでした（図7）。標本の採集年代から判断すると、顕著な減少がおこったのは2000年代以降と考えられ、これはシカ・イノシシが急増を始めた時期と重なるため、減少要因としてはシカ・イノシシによる採食や踏みつけ、あるいは下層植生の喪失による乾燥や土壌流出の影響が大きいと考えられます。

同様の手法をその他の種にも適用することで、

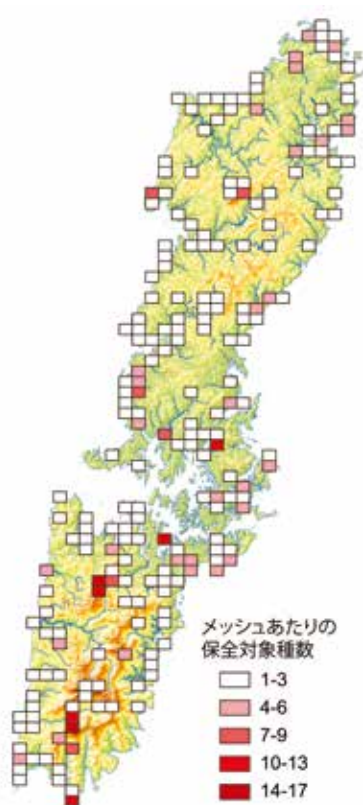


図8 基準地域メッシュ（3次メッシュ）あたりに生育する保全対象種の数。

すると以前から希少種が多いことで知られてきた山地の原生林以外にも、海岸付近の塩性湿地や低地林に保全上重要な種の生育地が散在していることが明らかになりました。前者の原生林は国定公園の特別

多くの植物の生育地が過去100年の間に減少していることが明らかになりました。対馬には約1200種の維管束植物が生育していると考えられますが、生育地の数やその減少の度合いから特に島内絶滅の危険性がある約320種を「保全対象種」としてリストアップし、これらが現在島内のどこにどれくらい生育しているかを地図上に可視化しました(図8)。

地域や天然記念物に指定され、保護されていますが、後者は私有地も多いため対策が進んでおらず、開発などによって意図せず消失する可能性もあります。そこで現在一部の低地林内において土地所有者の協力のもと植生保護柵の設置やシカ・イノシシ駆除などを実施し、保全対策を進めています。

このように、過去に採集された植物標本を活用することで、ある植物の分布や形態に関する情報を過去に遡って把握し、それを現在のものと比較して考察することが可能になります。これから総合研究博物館に収蔵されている標本を積極的に活用し、地域の植物相の解明や保全に貢献していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

引用文献

- 東浩司（2015）対馬に生育する対馬固有種および国内希少植物種の過去の分布記録と現状. 日本植物園協会誌, 50: 93-97.
- 岡山県（2020）岡山県レッドデータブック2020植物編. 岡山県環境文化自然環境課, p.228.
- 小西省吾, 吉川周作（1999）トウヨウゾウ・ナウマンゾウの日本列島への移入時期と陸橋形成. 地球科学, 53 (2): 125-134.
- 広島県（2022）広島県の絶滅のおそれのある野生生物（第4版）—レッドデータブックひろしま2021—, 種子植物. 広島県（環境県民局自然環境課）, p.413.

JSTOR Global Plantsにおける植物のタイプ標本の公開

田金秀一郎（総合研究博物館）

JSTOR Global Plants (<https://plants.jstor.org/>) は世界最大の植物標本のデジタル画像データベースであり、国際的な科学研究や協力の場として、植物学や分類学、生態学、保全の研究等で日常的に広く利用されているwebサイトです。現在は75カ国の330を超える植物標本庫が協力して200万点を超える植物のタイプ標本、および20万点の付随する



図. JSTOR Global Plants にて公開しているサキシマハブカズラのホクタイプ標本

写真や図版データを公開しています。当館植物標本室では、独自のデータベース (https://dbs.kaum.kagoshima-u.ac.jp/musedb/s_plant/s_plant.php) を通じて、収蔵する植物標本画像を多数公開していますが（2023年11月現在158,140点）、国際的に公衆の利便性を向上させ、重要な資料をより研究に役立ててもらうため、2023年にJSTOR Global Plantsとパートナー契約を締結し、当館が収蔵するタイプ標本を本サイトで公開することにいたしました。国内でJSTOR Global Plantsに参画する機関としては、国立科学博物館に次ぐ2例目の組織となります。従来で公開している画像に比べ、圧倒的な高解像度でタイプ標本が閲覧可能ですので、皆様の研究や同定の参照標本として等、是非ご活用ください。

マレーシア・クアantanの魚類多様性に関する国際共同調査

本村 浩之（総合研究博物館）

2023年9月19～25日にマレーシア・トレンガヌ大学と日本側魚類チームによる国際共同魚類調査「Ichthyofauna of the east coast Peninsula Malaysia 2023-2026: Kuantan Expedition」を実施しました。日本チームは、鹿児島大学総合研究博物館から7名、国立科学博物館から2名、三重大学、京都大学、北九州市立博物館から各1名の計12名で構成され、チームに加えて長崎大学からインターンシップでトレンガヌ大学に留学していた学部生も体験参加しました。トレンガヌ大学からはカウンターパートである Ying Giat Seah氏を中心に7名の教員と大学院生が参加しました。数年かけて申請・手続きしたABSに関する魚類調査や標本輸出の許可を得て、コロナ禍も落ち着き始め、満を持しての調査となりました。

日本チームは18日に成田空港周辺で前泊し、19日の20時にクアラルンプール国際空港に到着、その後、トレンガヌ大学の公用大型バスで5時間かけてマレー半島東岸のクアantanに向かいました。日付が変わった深夜1時にクアantanの宿泊場所に到着し、2時間の休憩と準備をして、深夜3時からクアantan漁港の水揚げ場で魚類の採集を行いました。

朝10時頃に漁港を引き上げ、マレーシア国際イスラム大学の実験室で標本の作製作業を行い、夜10時に宿に引き上げて、翌日の早朝4時からまた漁港で調査をするという充実すぎる日々を過ごしました。

調査期間中の22日にはトレンガヌ大学、鹿児島大学、三重大学、国立科学博物館から各1名が、マレーシア国際イスラム大学の教員や学生に対して魚類多様性に関する講演を行い、その後、標本作成のワークショップを開催しました。同日夜にはトレンガヌ大学長の Mazlan Abd Ghaffar氏が日帰りで合流しました。Mazlan氏はコロナ禍前までは一魚類研究者として2001年からの本調査プロジェクトに参加しており、一昨年から学長になっていました。

魚類調査は水揚げ場からの採集に加え、釣りや手網など様々な方法で行われ、期間中におよそ1,000個体300種を集めることができました。今後は各研究機関が持ち帰った標本を調査し、同定作業を進め、遺伝子解析や他海域から得られた標本との比較解析を行い、論文化を進めます。2024年、2025年にもマレー半島の別の場所で国際共同調査を行い、2026年にはトレンガヌ大学出版会から「マレー半島東岸の魚類フィールドガイド」を出版する予定です。



写真1 夜が明ける前のクアantan漁港



写真2 漁船から魚を水揚げ



写真3 クアantan川から漁に向かう漁船



写真4 クアantan漁港横の干潟で釣り採集



写真5 クアantan漁港横の干潟で手網採集



写真6 廃棄される混獲物から魚を探す調査メンバー



写真7 クアantan漁港でテッポウオ科を釣獲



写真8 クアantanにおける刺網漁



写真9 クアantanの砂浜でハゼ採集



写真10 国際イスラム大学の実験室で標本処理1



写真11 国際イスラム大学の実験室で標本処理2



写真12 国際イスラム大学の実験室で標本処理3



写真13 宿泊場所（一軒家）の前で朝食



写真14 中華風マレーシア料理店で国際交流



写真15 トレンガヌ大学長（前列中央）と記念撮影



写真16 トレンガヌ大学公用バスでクアantanを発ちKLに向かう



写真17 クアantanの夕焼け

大型魚類標本の保管スペースの移設

本村 浩之（総合研究博物館）

2022年度末に郡元キャンパスの総合教育研究棟共同溝と共同利用棟1Fに仮保管されていた大型の魚類標本を水産学部キャンパスの1号館北側標本室1～4と水圏生物標本棟（旧サークル棟）の標本室5～9に移しました（標本室10には無脊椎動物の液浸標本が保管）。水産学部キャンパスの標本室では、大型魚類標本が25～220リットルのプラドラムや1000リットルのジャンボックスで保管されていま

す。2リットル瓶に入るサイズの小型標本は引き続き郡元キャンパス共同利用棟1Fの標本庫で保管されています。登録番号が振られてデータベース化された魚類標本はおよそ20万点で（加えて画像資料20万点、DNA解析用組織切片7万点が登録済）、現在は未登録の標本10万点について整理・登録・配架作業を進めており、2025年度末の完了を目指しています。



写真1 25リットルのプラドラム in 標本室5



写真2 120～220リットルのプラドラム in 標本室6



写真3 1000リットルのジャンボックス in 標本室8

2022年度の活動の記録

昨年度も新型コロナウイルスの拡がりのため、さまざまな活動制限がありました。

特別公開「キモツキアジサイ」

2022年10月20日～11月30日

場所：常設展示室 入場無料

■鹿児島県の植物の新種「キモツキクサアジサイ」の記載を記念して、当館常設展示室で特別公開しました。本種のさく葉標本の展示と簡単な解説を行いました。

第21回自然体験ツアー「冠岳の植物」

2022年10月22日（土）9：00～12：00

場所：いちき串木野市・薩摩川内市、冠岳

講師：田金秀一郎（総合研究博物館）

参加者：5名

■冠岳の登山道約4kmを散策しながら、確認された植物97種の観察を行いました。

第4回 バックヤードツアー「植物標本庫」

2022年12月10日（土）10：00～12：00

場所：郡元キャンパス共同利用棟2階 植物標本室

参加者：1名

講師：田金秀一郎（総合研究博物館）

■「研究資料」としての植物標本の作成を目的とし、身近な植物の名前の調べ方や博物館での収蔵管理や収蔵標本の利用について解説しました。

第40回 市民講座「江戸後期薩摩藩の学問と学者たちの交流―増田直治をめぐって―」

2022年12月17日 13：30～15：00

講師：永山修一

（ラ・サール学園、鹿児島大学非常勤講師）

場所：オンライン・Zoomにて開催 参加無料

■総合研究博物館に寄贈された石碑資料「増田迂直墓誌」を題材として、江戸後期の薩摩藩をとりまく学問と学者たちについて解説いただきました。